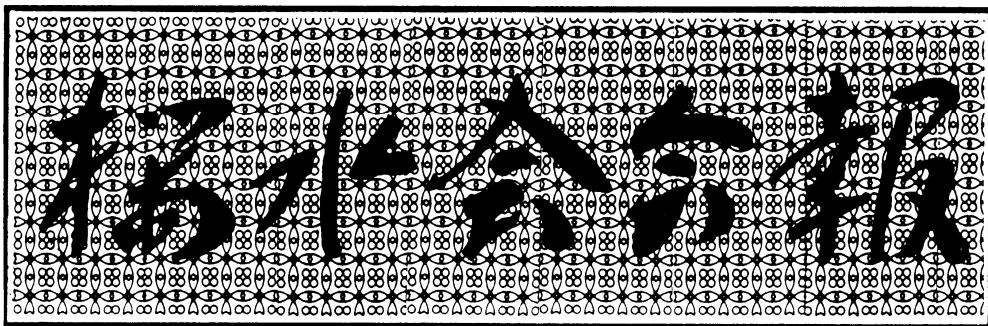




巻頭言

40号

桜水会会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のことと、お慶び申し上げます。

生物資源科学部におきましては、新学部長に大矢祐治氏が就任されました。藤沢の湘南校舎では、一昨年の新1号館に続いて新2号館が落成し、素晴らしいキャンパスに変貌しています。また、旧農獣医学部の三軒茶屋校舎跡地には、平成28年の4月より、次世代に向けた危機管理学部、およびスポーツ科学部が開設されます。

当会は、準会員（学生）の交友会費および会員による終身会費に支えられて運営が行われています。父母会の方からは、交友会費の透明性や準会員（学生）に対する支援の増強等が求められており、桜水会としましては、学科・学生行事への支援として、平成27年度は下記を実施しました。

- ①スポーツフェスタ（体育祭）でのTシャツの支給
- ②海洋基礎実習Ⅰ（1年次学生を対象とした下田臨海実験場における3泊4日の実習）でのジュース・お菓子の支給
- ③学科パンフレットの作成

- ④在学生の学会参加費の補助
 - ⑤昨年度より始まった、研究室の代表学生が卒業研究の発表を競う卒業研究コンペティションの補助
 - ⑥卒業生への記念品贈呈（男子学生：タイピン、女子学生：ブローチ）
 - ⑦学部校友会役員会・幹事会・総会・他学科懇親会への出席
 - ⑧桜水会総会時の懇親会における4年次学生の招待
 - ⑨箱根駅伝の応援（藤沢遊行寺坂上、正月2および3日）
 - ⑩総会時におけるウナギ学研究室塚本勝巳教授による講演の開催
- 会員各位様のご協力を得まして、一層発展して行くよう、役員・事務局の先生方と精進して参りますので、宜しくお願い申し上げます。

はしがせこ さとる
(会長 橋ヶ迫 寛)

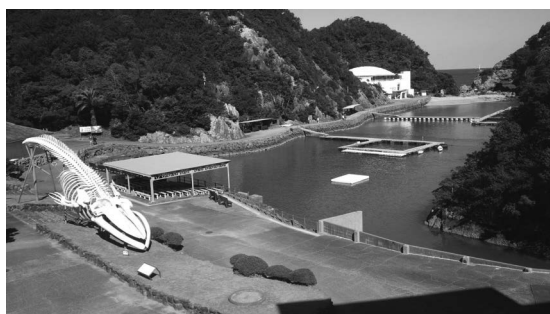
職場便り

太地町立くじらの博物館

副館長 桐畑 哲雄

太地町は和歌山県の南端にある人口

3,000 人程の小さな町です。古式捕鯨発祥の地として知られ、今でも鯨無しには語れない町で、これによりこの小さな町は、日本はもちろん世界にもその名を轟かせています。この町の捕鯨の歴史を後世に伝え、鯨への理解を深めていただくために 1969 年に建設されたのが太地町立くじらの博物館です。鯨に特化した施設で 1,000 点を超える資料と世界最多の 7 種の鯨類を展示する、正に「鯨の博物館」です。開館からまもなく 50 年を迎えるため施設の老朽化は否めませんが、自然の景観を生かした飼育展示施設は都会の水族館とは異なる雰囲気をかもし出しています。



自然の景観を活かした自然プール。

私は、1982 年に当時の農獣医学部水産学科を卒業後、千葉県にある水族館「鴨川シーワールド」に就職しました。ここでクラゲからシャチまで様々な水族の飼育展示に関わった後は、広報・企画や営業部門で、肉体労働からは解放された仕事をしていました。2007 年に太地町から施設の立直しをしてほしいとの要請があり、出向してお手伝いをするようになりました。立直しと言っても施設を建直すのではなく、飼育や展示のソフト面の立直し、言い換えれ

ば係員の指導と飼育展示の改善が業務でした。2 年間の勤務の後、一度鴨川に戻りましたが、2011 年に再度の就任依頼を受けて鴨川シーワールドを退職し、くじらの博物館の副館長として就任することになったのです。



コビレゴンドウ・オキゴンドウ・ハナゴンドウによる 3 頭ジャンプ。

太地は鯨類追込網漁業が盛んに行われており、皆さん良くご存じのバンドウイルカをはじめ 7 種の小型鯨類が毎年 1,000 頭近く漁獲されています。多くの水族館等にイルカ類を供給してきておりますので、この種の施設で働く者にとっては「聖地」ともいえる場所でもあります。鯨類を知る上では格好の場所ですが、反面、エコテロリストとの戦いの最前線ともなっています。彼らの気持ちは分からないでもありませんが、捕鯨や鯨類飼育を悪と断罪し、誇張、歪曲した思想、意見を事実のように発信する自己中心主義な考えは到底受け入れられるものではありません。彼らとの接点が多いこの施設の勤務は気苦労も絶えませんが、一層気を引き締めて「長期飼育と飼育下繁殖に努め、展示を通して社会教

育と調査研究に貢献していく」という、水族館の原点をしっかりと努めていかなければならないと痛感しています。

飼育係員は専門学校の卒業生が多いのですが、2013年に縁あって本校の卒業生1名を迎え入れる事ができました。彼女は、少ない人員の中で飼育はもちろん調査研究や医療補助、表示物の作成まで多分野の仕事をこなしてくれており、視野が狭くなりがちな飼育係員の中でマルチに業務をこなしてくれる頼もしい存在になっています。

(第31期)

農林水産省

農林水産技術会議事務局 研究推進課

荒井 大介

私は1994年に日本大学の水産学科最後の卒業生となり、藤沢校舎へ移転してから大学院を経て就職しました。職場便りということで、過去の職場と現在の職場について紹介させていただきます。最初に就職したのが、社団法人日本栽培漁業協会でした。当時は稚魚の餌である植物プランクトン、ワムシの培養、そして栽培漁業対象種の種苗を生産し、放流事業を行う都道府県や漁協に種苗の配布を行っていました。

当時は、パートや職員を含めても少人数のため、一日の仕事の作業効率が良くなるよう、人のやりくりを考え、飼育作業を漏れなくこなすことを心がけました。年齢が自分の母親ぐらいで経験あるパートに指示をする場合などは、日頃からの信頼関係

が非常に重要になります。作業をお願いする時は自分自身で一度経験し、無理のない作業、危険が伴うところは常に2人以上で取り組むなど、ストレスが少ない作業環境の整備に心がけました。

飼育の仕事では思ったような生産ができないこともありました。私が担当したワタリガニは、毎年の生産目標が約1,500万個体あり、これを楽に達成したことはありません。ワタリガニの幼生は水温24～28℃で飼育しますが、時に大量死が発生します。その原因は真菌症、壊死症、メガロパへの脱皮失敗、脱皮のずれによる共食い等々です。大量死が発生したときよく言われたのが「お前の飼育が悪くて幼生が死んで抗議している。だから、それを捉えて改善しなければならない」、また、飼育がうまくいった時でも「俺が作ってやっているという思い上がりはいけない。結局、担当者ができることは幼生の飼育環境を整え、最大の生育環境を提供すること」しかない。これは農林水産業に従事する方は、皆、殆ど同じ境地に達するのではないのでしょうか。その後、平成15年に当協会の解体があり、水産総合研究センターに異動してからは、キジハタ、トラフグ、マダイ、マダラ、マダコ、そして閉鎖循環飼育の研究に従事し、種苗生産担当者に貢献するための論文などの投稿を手掛けました。

現在は、水産庁を経て農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課に所属しています。ここでは、主に国の農林水産業に係る委託研究の推進や補助事業による研

究支援等を行っており、私の担当は、東日本大震災で被害を受けた地域を早期に復興し、新たな食料生産地域として再生するため、被災地で先端的な農林水産技術を実際の経営に導入し、生産コストを半減または収益を倍増させることを目標とした大規模実証研究です。地域によって内容は異なっており、宮城県、岩手県、福島県では「農業・農村型」、岩手県、宮城県では「漁業・漁村型」の実証研究が行われています。私は主に水産分野を担当しており、岩手県ではサケ、ワカメ、アワビ、水産加工、水産加工や流通に係る冷却のエネルギーに係る課題、宮城県ではカキ、ギンザケなどの養殖関連、サメの利用促進や水産加工に係る課題について、研究者の方々と共に取り組んでいます。

様々な研究成果が出てきていますが、現場での実証と普及には、もう少し時間がかかるものもあります。震災後、岩手県では高齢化や震災を機にワカメの刈取りの技術者が減少しました。また、基幹産業であるサケの放流事業においても、回帰率が低下し、放流尾数の減少やこれに起因する親魚の不足が問題となっています。津波の影響によりアワビの稚貝が流されているところもあり、持続的なアワビ漁を続けるための資源管理や漁獲収入の維持等が課題となっています。同様に、宮城県でもカキむきの人手不足や県産カキの付加価値向上、ギンザケ養殖の生産コスト削減、刺身商材を目指した高付加価値の向上、気仙沼で水揚げされるサメのアンモニア臭を抑

制した新しい食材としての活用など、多くの課題に対する対策が求められています。事業を通じてこれらの技術的な課題を解決し、被災地が復旧にとどまらない形で復興を目指し、後押しをしていきたいと考えています。

(第44期)

日本農産工業株式会社

北山 武憲

私は平成25年に本学博士前期課程を修了し、その後日本農産工業へ入社しました。会社名を聞いてもピンと来られる方はあまりおられないのではないかと思います。当社製品のヨード卵・光という商品をご存知の方も多いと思います。当社は畜産・水産用の配合飼料やペットフードの製造販売、先にも述べたような卵の販売を行っており、動物と密接に関わっている会社です。

入社して1年間の研修期間を経て2014年から愛媛県宇和島市で水産飼料の営業として主にマダイやハマチの餌を担当しています。宇和島市は愛媛県の南部に位置しており、海と山に囲まれた自然豊かな街です。神奈川育ちの私は最初こそ周囲の環境に戸惑いましたが、慣れると住みやすい街です。

昔から水産業が盛んなこの街は、真珠や養殖産業、特に養殖マダイの出荷量に関してはおよそ60%以上を生産しているマダイ養殖のメッカであります。そのため、近場の海には多数の生簀が浮いており、見晴

らしのいい丘からは一面生簀の浮かぶ海の光景は圧巻です。

水産飼料の営業はお客様が生産者ということもあり、朝は早い日が多いです。出荷作業や沖の生簀へ連れて行ってもらい魚の様子を観察します。魚は大きくなっているか？病気になるっていないか？餌は食べているのか？まだまだ経験の浅い私が一目見てすぐ判断できるということは少ないのですが、お客様と同じ作業を通して学んだことや、一緒に汗を流して得た経験というものは今後絶対役に立つと信じ、日々業務に邁進しています。冬は起きるのが辛い日もありますが、頂いた魚は何回食べても感動し、その美味しさに仕事の辛さも忘れてしまいます。

営業になってまだ1年半であり、日々勉強中の毎日ではありますが、本学で学んだことが養殖現場の最前線で役に立つことも多く、非常に助かっております。

最後に養殖物より天然物が好きという方も多いとは思いますが、昔に比べ管理方法や餌の内容も変化し、養殖魚はとても美味しくなっています。機会ありましたら、是非、愛媛産の養殖マダイをご賞味ください。

(第60期)

愛媛県 農林水産研究所 水産研究センター

水野 駿平

桜水会会員の皆様におかれましては、ご盛栄のこととお慶び申し上げます。私は現

在、愛媛県農林水産研究所水産研究センターにおきまして、魚介類の種苗生産に取り組んでいます。本センターでは、マダイ、マハタ、クエなどの魚類や、クルマエビ、アコヤガイといった介類の種苗生産を行っており、私はこれまでに、マダイ、マハタ、クエを中心とした魚類の担当をしてきました。生産した種苗は、県内の養殖業者に販売したり、県内の放流事業に使用したりしています。

愛媛県では、南予地域を中心に魚類養殖業が盛んであり、今や、全国一の養殖県の地位を占めるに至っています。特にハマチやマダイについては、全国有数の生産量を誇っています。しかし近年、価格決定の主導権は大型量販店などに移行しつつあり、価格は低迷しています。従来型の流通・販売では、経営の維持が困難になりつつあるのです。

愛媛県ではこのような現状を打破するため、安全で美味しい魚を養殖するための研究、新たな養殖魚種の研究などが行われています。具体的には、養殖魚に付加価値を付けていかに高く売るかという価格対策の視点から、イヨカンの果皮や精油を使用した「みかんフィッシュ」の開発、養殖魚種の多様化により産地の差別化を図るための新しい養殖魚種「スマ」の種苗生産および養殖技術の開発、また生産コストの削減や生産の安定化のための魚病対策ワクチンの開発などです。

このように養殖魚に付加価値をつけて競争力を高める努力が、水産物のブランド

化につながり、「儲かる水産業」が確立され、最終的に地域経済に大きく貢献することが目標となります。皆様の一層のご健康を心よりお祈り申し上げるとともに、今後とも愛媛県の水産物をご愛顧賜りますようお願い申し上げます。

(第 60 期)

東洋冷蔵株式会社

柴山 一輝

私は平成24年3月に卒業し、同年4月に東洋冷蔵株式会社に入社しました。

大学在学中は養殖サンゴの病理解析を主とした卒業研究に取り組んでいました。就職活動については、将来は海関係・水産関係で働きたいという漠然としたものしかなく、東日本大震災もあり、日本中が混乱している最中でもあったため、本格的な就職活動は少し遅れてスタートしたと記憶しています。そして、母校で開催された会社説明会で、東洋冷蔵の人事担当とOBから会社の事業内容と仕事内容の説明を受けたことがきっかけで入社しました。

よく友人から東洋冷蔵という社名から「冷蔵庫に就職したの？」と聞かれることも多いのですが、冷蔵庫の会社ではなく、マグロを中心とした水産物の仕入れ・販売を行う会社です。なぜこの会社を選んだのか？それは至って単純です。「面白そうだったから」、「大きな規模で仕事ができそうだったから」、この2点が志望動機でした。

実際に働いてみて思うことは、マグロは奥が深いということです。入社後、約一年

間は静岡県静岡市清水区で過ごし、主にマグロの水揚げ・加工場での研修を受けました。冷凍マグロが次々に水揚げされ、全国に運ばれていくのを見たときには、そのスケールの大きさに圧倒されました。

マグロの品質を落とさないためにはマイナス50℃以下の冷蔵庫（超低温冷蔵庫）が必要であることを知り、ますますマグロの虜になっていきました。研修期間後は、いよいよ本配属です。私は営業第二部というカツオと巻き網船で漁獲されるキハダマグロを主要商材として取り扱っている部署に配属されました。そして、主に静岡県焼津港に入港する遠洋冷凍一本釣り船から水揚げされるカツオを仕入れ、全国の支社・支店への販売をサポートする仕事や、海外でマグロの水揚げ現場に赴き、日本向け（刺身用）に輸出する魚の品質を見極める仕事に携わっていました。

自分が海外から仕入れてきたマグロが日本の食卓に並ぶと思うと、やりがいのある仕事をやらせてもらっていると感じ、楽しみながら仕事をしてきました。様々な国の人との出会いも今となってはかけがえのない宝物です。

平成27年4月、大阪支店に異動し、現在は「マグロを売る」仕事（営業）をしています。内容としては、量販店や外食産業のバイヤーへ、マグロやカツオの商品提案をしていく仕事になります。

マグロには多くの種類や部位があり、それぞれ価値が異なります。また、商品の形態によっても価値が変わってきます。お客

様が何を求めているのか、今の流行は何かを掴むことも重要です。自分で提案した商品がお店で販売されることが決定したときは、とても嬉しかったです。

今、日本では「魚離れ」が問題になっています。私も肉類を食べる機会が多く、肉も好きです。しかしながら、この世界に入り「マグロの美味しさ」を実感しました。学生時代、スーパーでマグロを買うことなど滅多になかったのですが、やはり食べると美味しいんですね。だからこそ、多くの人に食べてもらいたいと願っています。

(第61期)

曾田香料株式会社

光岡 涼子

私は平成25年に海洋生物資源科学科を卒業し、曾田香料株式会社に入社しました。大学4年生の時は海洋資源育成環境学研究室でフグ毒の研究に取り組み、糸井先生や杉田先生には大変お世話になりました。就職活動中は、業種を絞らず色々な企業の説明会に足を運び、そのような中、曾田香料を知りました。「香りをつくるなんてお洒落で華やかそう」というイメージでしたが、実際は研究の世界という感じです。今回は弊社で扱っているフレーバーとフレグランスについて少しばかりお話させていただきます。

フレーバーと呼ばれる食品香料は飲料や製菓、調味料、医薬品、たばこ、飼料などに使われています。形態もエッセンスやオイル、乳化状や粉末状など、目的や用途

によって様々。弊社で現在生産しているフレーバーは約2,000種類もあります。例えば「イチゴの香り」といったら皆様はどのような香りをイメージされますか？酸味を感じられるもの、真っ赤に熟したジューシーなもの、イチゴの種の粒感を感じられるものなど、人によって違うと思います。同じ様にメーカーの依頼も様々で、果実感をアップさせたい、食感を軽くしたい等といった要望があると、それに合わせて香りをつくります。弊社のフレーバーリストは300種類以上の香りを嗅ぎ分けることができ、メーカーに依頼された香りを再現し多くのヒット商品を生み出しています。

「香料」と聞くと、添加物だから身体に悪そうだなという印象を受けがちですが、実際はそうではありません。香料には天然香料と合成香料があり、合成香料は化学構造がほとんど天然香料物質か食品成分と同一なものです。フレーバーを混ぜることで私たちは食品をより美味しいと感ずることができるのです。

次にフレグランスについてです。香水をイメージされる方が多いかと思いますが実際は石鹸や洗剤シャンプーやリンス、化粧品、医薬部外品、工業製品、香りグッズなどに使われています。調香師（パフューマー）は原料の混合率や時間によって香りがどう変化するかを考えながら作ります。普段から沢山の香水やコロンを嗅いで、どのような香料素材が使われているのか、わかるよう嗅覚を磨いています。フレグランスについて、私が新入社員の時に受けた研

修で印象に残っていることがあります。それはアンバーgris（龍涎香）という鯨の腸内結石に含まれる香料があるのですが、それを単体で嗅いだ時は物凄く臭かったのに、ジャスミンの香りを少量混ぜるととても華やかで気品のある花の香りになりました。「あんなに臭かったのに一体何が起きたんだ!？」と驚くほど興奮したのを覚えています（笑）。フレグランスは想像力とセンスが必要な依頼が殆どです。「夜空に広がる星をイメージした香り」や「白いワンピースを着た女性をイメージした香り」など、情景が頭に思い浮かぶような香りを作らなければなりません。なかなか想像できないと思いますが、とても夢のある仕事だなと感じています。

香料によって食品の美味しさや価値がアップしたり、生活にゆとりや豊かさをもたらすことができるのは本当に魅力です。私は香りで人を幸せにできるこの会社で働いていることを誇りに思っています。入社してまだ3年ですが、仕事に追われるのではなく、自分から仕事を追って楽しく頑張りたいと思います。

（第62期）

原稿の募集

桜水会会報 41 号の原稿を募集します。「職場便り」「近況」「クラス会」「随筆」など、800～1,000 字程度にまとめ、平成 28 年 12 月末までに下記にお送り下さい。なお、原稿は下記の電子メール（添付ファイルの場合、Word で作成のこと）でも受け付けています。

（送付先）〒252-0880

神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部

海洋生物資源科学科内

桜水会事務局 宛

E-mail:

fukushima.hideto@nihon-u.ac.jp

（福島）

研究室便り

海洋生物生理学研究室

卒業生の皆様におかれましては、お変わりなく過ごしていらっしゃいますでしょうか。研究室では、今年度も一連の諸活動を行いつつ、学生たちとともに多彩なテーマで研究に取り組みました。臼井俊樹君が「バンドウイルカにおける熱産生機構と主要部位の推定」という題目で博士前期課程を修了し、9名の4年生がなんとか卒業まで漕ぎ着けました。残念ながら卒業に至らなかった学生が多く出てしまい、私が初めて直面する事態ともなりました。理由は諸々あれども、学生が「前のめり」な姿勢で研究に主体的に携わり、完遂できるように、これまでの指導の仕方を見直すべき時に来ているのだろうと思う次第です。

話は変わりますが、最近、友人が中世の芸能に関する一般書を出版しました。内容もかなり面白いのですが、その文体はいきいきとしていて、言葉遣いや流れが美しく、ハッとさせられました。分野は色々あれど、全ての学問は言葉を紡いでいく作業でもあると考えています。美しい英語で論文を書くのはかなり困難ですが、せめて日本語を書くときには的確かつ美しい文体で成果を残していけるよう、私自身も研鑽を積みねばなりませんし、学生たちにもそう努めるよう伝えていけたらいいなと思っています。

(鈴木)

月日の経つのは早いものです。私は1981年4月から日大に勤め始めたので、今年で35年目になります。学部は今、教授の再雇用制度を導入するかしないかで

もめています、何れにしても現在主流の研究室教員2名体制では、教授が辞めないで新任は採れないので、辞めていく教授と新しく入ってくる教員との間に断絶が生じます。このことは後に、研究室内に問題を生じる原因となることがあり、できれば1年間くらいは重複して、諸事引き継ぎを済ませて出ていきたいと方策を考えていますがうまくいくかどうか・・・。

鈴木先生も書いていますが、卒業する研究室4年生が一桁というのはここ20年ほどなかったことで、今年度は色々と考えさせられました。昨今、様々な入学枠で多様な学生が入学してきますので、それぞれの個性を見ながら個別に対応していかなければならないとわかっていても、なかなか時間が取れません。この歳になって、自問自答しています。

ともあれ、あと何年かは日大にいますので、近くに来る機会があれば、研究室にも是非お立ち寄りください。

(朝比奈)



海洋環境学研究室

卒業生の皆様には、時下、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平成 27 年度の本研究室の構成は、廣海十朗教授、荒 功一准教授、小糸智子助教の教員 3 名、大学院博士後期課程 3 年 1 名、4 年次学生 14 名（うち女子学生 2 名）でした。研究テーマとして、ロシアにおける海産生物、特に海藻を利用した機能性食品の開発（廣海教授、ロシア連邦・極東連邦大学との共同研究）、2000 年 12 月より継続して 15 年目となる「相模湾沿岸域における海洋構造とプランクトン生態系の構造解明に関する研究（プロジェクト“SHONAM”）」（平成 27 年 12 月末に観測 350 回達成）、相模湾沿岸・中央域での物理・水質環境の長期変遷、江の島沿岸域でのクラゲ類の出現動態などを調べています。また、小糸助教は、今年度で退役する調査船「かいよう」に乗船し、学部 4 年生 2 名とともに伊豆・小笠原海域で深海生物のサンプリングと分析を行ないました。また、深海に限らず、タイマイやサケ等の研究も実施しております。

平成 28 年 2 月に本邦の有害有毒赤潮プランクトンに関する最新の知見を集結した専門書「有毒有害赤潮の科学」（恒星社厚生閣）が出版され、その中でプロジェクト“SHONAM”の一環として調べられた相模湾沿岸域（江の島沖）での夜光虫の動態、その水質環境ならびに海洋生態系における役割に関する研究の成果（荒准教授が執筆）が掲載されています。海洋研究開発機構（JAMSTEC）の世界周航研究航海（航海名称：QUELLE（クヴェレ）2013）の一環として実施され、荒准教授が参加したブラジル沖の南大西洋での有人潜水調査船「しんかい 6500」潜航調査において、これまで

で最も深い水深 4,204 m の海底で鯨骨生物群集（少なくとも 41 種確認、その全てが新種の可能性が高い）が発見され、その成果は英科学誌 Scientific Reports に平成 28 年 2 月 24 日付けで掲載されました。

昨年度より、各研究室から選出された学生による卒業研究コンペティション（塚本賞）が始まりました。当研究室の代表となった山本 岳君が、さかなクンよろしく白衣を纏いクラゲの被り物で発表した「相模湾江の島沿岸域におけるクラゲ類の出現動態の季節変遷」が栄えある第 2 位に輝きました。これは在学生の投票によって決定するので、学生にとって分かりやすく面白いプレゼンテーションであったのだろーと思います。このプレゼンテーションスキルを活かして社会で活躍してくれることを願っております。

今年度は本学科海洋生物資源応用コース（JABEE 対応コース）の技術者教育の一環である特別講義（3 年次、前期）で、7 月 8 日（水）に宮下一明氏（第 38 期、（株）東京久栄）が「環境アセスメントにおける技術士の役割」、7 月 15 日（水）に市橋 理氏（第 37 期、アジア航測（株））が「環境コンサルタントの仕事～東日本大震災と自然環境」という標題で講義を行いました。10 月 23 日（金）には、海洋環境保全・修復学実験の一環で藤沢市大清水浄化センターを訪れた際、和田圭輔氏（第 57 期、藤沢市役所）に施設の紹介をして頂きました。多方面にわたる分野で活躍されている OB・OG の皆様には講義や学科イベント等にご協力を賜り、深く感謝致します。今後とも色々お願いすることがございますが、ご

承諾いただければ幸いです。

平成 28 年度の研究室は、上記の教員 3 名、大学院博士前期課程 1 年 1 名、4 年次学生 9 名(うち女子学生 1 名)となります。

卒業生の皆様が湘南(藤沢)キャンパスの近くへお立ち寄りの際には、海洋環境学研究室にお越し頂き、後輩達を叱咤激励して頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

(小糸・荒)

増殖環境学研究室

冒頭で悲しいお知らせをしなくてはなりません。昨年は私どもの研究室に関係の深いお二人の先生が帰らぬ人となりました。

5 月に、学部研究員の萩谷盛雄先生がお亡くなりになりました。先生は、ヒラムシなど扁形動物門渦虫綱多岐腸類の分類学的研究では我が国の第一人者であり、研究室の院生や卒論生にたいへん丁寧にご指導していただきましたが、5 月 5 日に肝疾患のため、66 歳の若さで急逝されました。

12 月には本学名誉教授の出口吉昭先生がお亡くなりになりました。先生は、平成 11 年 3 月に本学をご退職されてからは、ご自宅近くの区民プールで水泳を楽しむなどたいへん健康に気遣われ、毎年、桜水会総会にもご出席されておられました。昨年、体調を崩され、闘病生活を余儀なくされておりましたが、12 月 11 日に心不全のため、鬼籍に入られました。なお、先生のご業績については別項で記させていただきます。

お二人の先生のご冥福を謹んでお祈り

申し上げます。

本年度の研究室構成は、教授・杉田治男、准教授・糸井史朗、研究員 2 名、大学院博士前期課程 2 年次 2 名、同 1 年次 3 名、学部 4 年次 31 名の総勢 40 名でした。来年度は、研究員 1 名、院生 5 名、4 年次 21 名となりますので、今年より大分コンパクトになります。ここ数年、入室学生数が大きく変動しており、その理由が気になるところです。本年度は、平成 13 年度卒業の相川健志氏が代表を務める NPO 法人ゆめたまに 3 年生 10 名のインターンシップ(学外特別研修)をお願いしました。参加した学生は、単に生き物を扱うだけでなく、小中学生の指導法や実社会で役立つビジネススキルについても鍛えられ、実りある研修でした。

本年度の研究成果は、学術論文が 3 編(国際誌)および国内学会での発表が 6 件でした。糸井准教授が主導するフグ毒関連の研究は順調に発展しており、Elsevier 社刊行の国際的学術雑誌”Toxicon”誌では現在、最も多くダウンロードされた論文(Most downloaded articles)の第 1、2 位を独占しております(2016 年 2 月末時点)。いずれ、引用件数も伸びてくるものと期待しております。私のほうは、相変わらず魚類の腸内細菌とプロバイオティクスをメインテーマにしておりますが、こちらも海外の研究者に引用される件数が年々増えており、それを励みとしております。

湘南キャンパスでは、一昨年の新 1 号館につづき、新 2 号館が完成しつつあります。多くの卒業生に馴染みのあった旧 1・

2・3 号館を建て替えたのが新しい建物です。以前の建物は L 字を 3 つ組み合わせた構造の 3 階建てでしたが（竣工当初は 2 階建て）、新 2 号館は 2 階建てで、屋上緑化が施されております。正門を入ると、新 2 号館の屋上に通じる階段があり、下から見上げるとピラミッドのようです。1 階には学部事務局（教務課）と入学センター、大講義室などが設置されるようです。とても目を引く形状の建物ですので、卒業生の皆様には桜水会総会（6 月 11 日）や学園祭（10 月 29～31 日）などの機会に是非、ご覧ください。

4 月に松宮先生から学科主任を引き継いでおりますが、日常業務に振り回されて 1 年が経ったというのが正直な感想です。一時に比べると学部の正規職員が半分近くに減っており、多くの業務を学科で分担する必要があるというのが忙しい理由のひとつです。1 年の残任期間を何とか無事終わりたいと思っておりますが...

（杉田）

海洋生物資源利用学研究室

平成 27 年度より、当研究室は福島英登准教授を迎え、松宮と福島先生の 2 名の教員による研究室運営を開始しました。これを機会に、さらに中身の濃い教育・研究を目指したいと思っております。本年度の研究室所属学生・研究生は大学院博士後期課程 3 年次 1 名、1 年次 1 名、大学院博士前期課程 2 年次 3 名、4 年次学生 24 名、研究員（博士）1 名、大学院研究生 1 名および学部研究生 1 名でした。本年度の博士後期課程 3 年・柿崎博美君は無事に学位論文

審査に合格し、博士の学位を取得予定です。また、博士前期課程 2 年次の川島聖史君、梶原和正君、松永岳君も無事 2 月 5 日に修士論文発表会を終えました。それぞれの進路先での活躍が楽しみです。新年度（平成 28 年度）に向け、大学院博士前期課程にはすでに 2 名の進学が決定しており、さらに 5 名が受験予定です。また、4 年次学生は 22 名を予定しており、相変わらずの大所帯で研究と各自の味覚を鍛える活動に励んでおります。

研究内容に関しては、平成 28 年度より福島先生も着任 2 年目を迎えるのに伴い、先生の専門である水産食品の加工・貯蔵に関する基礎・応用研究のテーマをさらに充実することと致しました。松宮が進めてきたバイオマスの有効利用に関する基礎・応用研究のテーマも含め、水産加工技術から生化学・分子生物学的手法までを幅広く用いて研究を進めております。

研究成果は国内・国際学会（27 年度はドイツで 3 名の院生が発表）、ならびに国際ジャーナルにて発表しており、平成 28 年度もこれらをさらに推進させたいと考えております。

平成 27 年度は学科のカリキュラム改正後 2 年目を迎えました。したがって、1・2 年次は新カリキュラム、3・4 年次は旧カリキュラムでの講義・実験・実習を実施しました。当研究室担当科目の大きな変更点としては、旧カリキュラムの海洋生物機能応用学ならびに同実験（何れも 2 年次）を新カリキュラムでは水産利用学ならびに同実験（何れも 2 年次）に変え、在学生・高校生からも名称から内容をイメージし

やすいように変更した事が上げられます。この変更には、2年次から主たる就職先である水産業界を意識してもらいたいとの意図も含めておりました。この変更に伴い、特に実験内容を大幅に組み立て直しましたが、研究室所属院生によるTAならびに4年次学生の協力により、無事に新カリ初の水産利用学実験を終えることができました。また、古くから研究室の実習として継承してきた食品加工実習（4年次、海洋生物資源科学実習）では、本年度はサバ水煮缶詰、ポークソーセージ、アイスクリーム（何れも夏の実習）、ミカン缶詰、板付け蒲鉾（何れも冬の実習）を製造し、工場見学ではビール工場を見学しました。研究面ではタンパク質、遺伝子関連の実験に従事しますが、将来食品企業で活躍する人材育成の上でも、これらの食品加工実習を研究室の財産として伝承していければと思っております。

（松宮）

魚群行動計測学研究室

本年度は学部4年生20名、大学院修士課程2年1名の計21名と教員2名での運営でした。本年度途中の8月から牧口先生が長期海外派遣研究員としてカナダに留学され、サケ科魚類の各種研究に取り組んでおられます。13ヶ月間の留学では、所定の成果を挙げられて帰国後さらに教育と研究に邁進されることを期待しますが、同時にリフレッシュされることも重要です。本年9月にはお元気な姿で帰国されることを祈ります。

本年度研究室に所属した院生と学部生

は、北海道標津、静岡県富士、静岡県赤沢や下田臨海実験所、あるいは学部の実験室や外部研究機関で各自熱心に研究に取り組みました。途中いろいろな悩みを抱えた時期もありましたがその後克服して、大学院生は2月5日の修士論文発表会で、学部生は2月3日の卒業研究発表会でそれぞれ無事に口頭発表を終え、その後大学院生は修士論文を提出し、学部生の一部は卒業論文が今現在未提出ですが、提出し完成させる予定です。

本年度は、研究室卒業生が工場長を勤める北海道松前町のスルメ加工会社に、3年次学生が約2週間実習生として研修に励み、北海道新聞でも大きく取り上げられました。この他、自主的に神奈川県内の漁業関係者とコンタクトを取って、各種の漁業を体験している学生も居ります。第1次産業の若者離れが憂慮される昨今ですが、当研究室では最近、漁業現場の体験を希望する学生が増えてきております。意識の高い彼らのこれからの成長を見守りたいと思います。この他、恒例となりました北海道大学水産学部練習船おしよろ丸による小笠原近海への航海、および鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸による東シナ海への航海を、海洋生物資源科学実習や海洋生産学実験の一環として実施しました。おしよろ丸では今年もキハダが漁獲され、かごしま丸はトロール操業の他、奄美大島に寄港するなど、学生達には忘れられない思い出になったことと思います。おしよろ丸やかごしま丸など、他大学の漁業練習船に乗船したという経験は、船や海への興味と憧れをもたらすばかりでなく、将来仕事をす

る中でいつか、人とのつながりを育む絆になることもあるかと思います。他大学の学生さんと、今後交流が深まることを期待しています。

本年度の就職状況は、大学院生および学部生とも、就職を希望した学生は全員就職先を決定することができました。本年度の特徴として、西日本各地の水産関係の仕事に就く学生が例年に比べて多いことが挙げられます。彼らに対して今後とも、会員各位の温かいご指導ご鞭撻を賜りたく、お願い申し上げます。

終わりに、今年も数多くの卒業生が研究室を訪問された際に、在室学生に対する物心両面で様々なご厚情を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(小島)

水族生態学研究室

平成 27 年度の所属学生は、大学院生 2 名(修士 2 年)、学部 4 年生 22 名、学部 3 年生 19 名の合計 43 名でした。大学院生と学部 4 年生は、それぞれ修士論文と卒業論文を書き終え、春の修了・卒業が無事に決まりました。現在の研究室体制となった 2012 年度以降、本研究室の 4 年生で卒業できなかった学生は未だ一人もおりませんし、これからも脱落者が出ないよう全力をあげていきたいと思います。そのために、今後も研究室の教育目標として、「教養を培う」「協調性を養う」「社会的競争力を高める」という 3 本柱を継続的に据えて徹底していきます。

平成 27 年度の中心研究課題は、科研費の採択課題である「アユの生活史と魚病発

生機構の関係」に関する研究、および学部総合研究助成金の採択課題である「福島県における残存放射性物質のヒメマスへの蓄積機構」に関する研究でした。どちらの研究課題においても、意欲的なメンバーが熱心な活動を展開してくれましたので、多くの有益な知見を得ることができました。

また、従来からの研究室の主軸テーマである「メジナ属の種分化と黒潮の関係」に関する研究でも、意欲的なメンバーによる地道な取り組みにより、画期的な知見を得ることができました。現在に至るまで研究報告例の無かったクロメジナの成熟個体が黒潮上流海域で見つかったのです。この成果により、これまで謎であったクロメジナの産卵海域の目星がついたと言えます。今後、クロメジナを漁獲する漁業者や尾長グレ釣りを愛する釣り人に、面白い研究報告をお届けできると思います。

平成 28 年度のメンバー構成については、現時点で教員 2 名と学部 4 年生 19 名までが確定しております。この年度末に博士後期課程への進学試験を受ける院生がおりますので、その院生がもし合格すれば、研究室の浅い歴史の中で初めての博士院生が誕生します。結果がどう出るか、現在、固唾を吞んで成り行きを見守っております。新年度 3 年生の所属研究室は 4 月に決まりますので、今年の 3 年次所属学生の数 は未定ですが、今年も 20 名ほどを研究室に受け入れたいと考えております。向上心のある新 3 年生が沢山本研究室に希望を出してくれることを願っております。

最後になりますが、今年度もとても意欲的なメンバーが多く、研究室の雰囲気は一

年間を通じて賑やかで良好でした。28 年度も良い雰囲気の研究室を目指して努力していきたいと思います。変わらずご支援頂けますよう、謹んでお願い申し上げます。



ゼミ合宿でのカヌーレース（西富士）
今年も白熱しました



調査完了のビクトリー・ポーズ。今年もみんなで協力し、楽しく調査しました！
（高井）

ウナギ学研究室

ーうなぎプラネター

桜水会報を書くのもこれで3回目。1回目は2014年2月に『新設「ウナギ学研究室」』という題で、日大・海洋に新しくで

きた世界初のウナギ学研究室の紹介をしました。翌年の2回目は「ウナギ学研究室第一期生」というタイトルで、初めて入室してきた9名の卒論生のことを中心に報告しました。さて今年はというと、研究室はさらに忙しくなって、書き切れないほど沢山のことがあった一年でした。しかし、その中で選ぶとするなら、やはり「うなぎプラネット」でしょうか（図1）。



図1 「うなぎプラネット」のロゴマーク
（日大芸術学部木村政司教授制作）

うなぎプラネットは、日本大学の学部連携総合研究プログラムです。27年度に予算が付いて、生物資源科学部、芸術学部、理工学部、文理学部など、計9学部20名の教授・研究者がウナギの生物学、河川環境、文化、流通、経済など、あらゆる角度から総合的にウナギを理解し、この地球上で末永く人とウナギが共存できるようにしようというものです。また大学で得られた研究成果を積極的に社会に発信するよう、3つのアウトリーチ活動も設けました。

その第一は、大学博物館における特別企画展「うなぎプラネット」。7月1日にオープンして6ヶ月間の会期中に1万5千

人を超える入場者がありました。同時に行われたスタンプラリーは、知らず知らずのうちにウナギの生活史を理解できると、参加した子供たちだけでなく大人にも好評でした。桜水会の皆さんの中にもオープンキャンパスや学園祭の折、ラリーに参加して全スタンプを完成し、プレゼントの「ゆらゆらウナギ」をゲットした方も大勢いらっしゃるのではないかと思います。

次は、ウナギ保全のためのシンポジウム。ウナギ展の開幕と閉幕時に合わせて 6 月と 12 月の 2 回開催されました。7 カ国 40 名の研究者が集まり、各国のウナギ資源と保全活動について発表しました。約 300 名の参加者はウナギ研究の最新情報を共有し、ウナギ文化の広がりを変えて認識すると共に、どうすればウナギを保全できるか考える機会をもちました。

最後は「うなぎキャラバン」です。これは全国の小中高校に出かけて行う出張授業（写真 1 と 2）。子供たちにウナギの不思議や自然環境の大切さ、川や海の生き物の面白さと研究の楽しさを分かりやすく伝えるのが目的です。授業は 90 分間、映像や実際の標本を見ながら、質問回答の対話形式で進められます。経費は「うなぎプラネット」の予算から支出されるので、出張先の学校に一切負担はかかりません。この 1 年間で沖縄から北海道まで全国 84 校を訪問することができました。来年度も予算が付いてキャラバンを実施する予定ですが、7 月中旬から 10 月上旬まで 3 ヶ月の南太平洋ウナギ産卵場調査航海があるので、この期間を避けてキャラバンすることになります。本年度同様、申し込みのあ

った学校は全て、万難を排して行こうと思っています。



写真 1：函館・遺愛女子中学・高等学校で
うなぎキャラバン



写真 2：北海道教育大付属小学校で
うなぎキャラバン

研究室全体が巻き込まれたうなぎプラネットでしたが、その慌ただしさの中でも 3 名の卒論生たちはよくやりました。河邊真子さんは環境 DNA の新しい手法をウナギ研究に応用するため、地道な基礎実験と河川採水調査をこつこつとやり遂げました。5 月のなつしま研究航海でも環境 DNA で親ウナギを探索する新しい取り組みに挑みました。芹澤健太君は宮崎の山奥

にできた国際うなぎラボに延べ4ヶ月もの長期に亘って滞在し、バイオテレメトリー法を用いて実験地の中のウナギの行動を克明に観察しました。三門優真君は小笠原沖で放流された親ウナギのポップアップタグ放流実験のデータ解析に携わり、昨年度マリアナ沖の産卵場で観察されたものと同様な日周鉛直移動を発見しました。これらのデータはいずれもウナギ学研究室の今後の研究活動を支える大きな礎となることでしょう。

もちろん、研究室の渡邊俊さん、山梨津乃さん、マイケル・ミラーさん、それに2人の頼もしい大学院生、樋口貴俊君と竹内綾さんも大活躍の1年間でした。皆様ごろうさま。心から礼をいいます。

(塚本)

生物機能化学研究室

ー 春を呼ぶメール ー

日本酒が恋しくなる晩秋の夕暮れだったと思う。コンピューターが放つ、いつものYou got a mail! の音で、僕もトム・ファンクスになりきってメールを開く。メグからのメールかと思いきや、誰だ? と思いだすにも何秒かを要した。

“森先生、お元気ですか? 卒業してから何年振りでしょうか? ……で始まる文面を読み進めるうちに、その卒業生の姿が私の前に表れた。その子の記憶が私の脳に初めて刻まれたのは3年生の学生実験の時だった。

汗水垂らして実験説明をして、ふとその学生の見ると、しきりに実験テキストに私の似顔絵を落書きしているのである。それ

もとても上手なのである。おいこら! と声を荒げたところであったが、思わず見とれてしまった。ただ、もっとハンサムだろう! との突っ込みを入れたくはなかったが。不思議とその学生のことは私の臉に残っていた。教員にとって記憶に残るのは基本的に2つのパターンで有るのだが。一つは優秀な学生! 極めて優秀であるため、質問攻めにしてくれ、脂汗を流させてくれる喜びを与えてくれる学生である。もう一つはロクデナシの学生ある。授業が始まって30分も過ぎているのにマンガを持って教室に入り込んで、 “この授業は何にも分かんないんだよー” などと叫ぶ大物ぐらいである。私はこの手の学生により脳の血管壁を2回破らされている。血管壁は3層の壁でできている為、あと1回破裂させられると私も多分、向こうに連れていかれることになるため、最近では意識して授業中に怒ることを放棄している。ただ、大学を離れて家に帰っても、最後の血管壁は風前の灯である事には変わりはないが。

さて、なぜその学生のことが私の記憶に残っているのかだが、それはその学生が実験中に孤立していたからであった。学生実験はある程度の人数で実験を行う。そのため、どうしてもその班の中で自分に自信のある学生が主導権を握る。そのため自己肯定感の低い学生や勉強に興味の無い学生はみんなの中に入らず、孤立する傾向がある。その学生は他の学生とも言葉を交わすことも無く、ただ実験をしている仲間を眺めている様子だった。私は “実験はできるだけみんなが参加してね!” と声をかけてみたが、その学生は実験に直接手を出すこ

とも無かった。その後も、自信の無さそうな、その学生の様子だけは気になるため、注意をして観察していた。それから暫く経ったある日、学生の研究室配属が決まる日だったと思う。全く人気の無い私の研究室に配属希望をする学生の名簿が届いた。あっ！この子はもしかして？と思ったらやはり、あの学生であった。

しかし、研究室に配属されると、教員として色々な義務が生じる。先ずはこの1年間無事に研究室に来てもらわなくてはならない。更にはしっかり卒業研究をさせなければならない。どこかに就職もさせたいのである。とは言っても私が面接に行く訳ではないので、基本的には応援である。そのためか、まるで我が子を見ているように私が疲れるのである。私がその学生を研究室に迎え入れるため気遣った事が一つある。その子の特性を同級生や上級生に理解させることである。1つ、基本的に真面目であり、嘘をつかない子である。2つ、少しボケているが、本人はいたって真剣である。3つ、思考回路が人とは少し異なるかもしれないが、決して周りの人間はイライラしてはいけない。この3点を言い含められた学生達の中で、その子は生活しているうちに笑い声や明るい表情を研究室で見せるようになった。しかしである、卒論指導は困難を極めた。おかしい！僕は一応標準日本語を話しているはずだけど！と思う事は毎日であった。なぜ、そうなるのかを分析してみた。言葉の中に幾通りかの解釈の仕方が有る場合は、決まって私の解釈とは異なる方向に理解している様であった。これは途方も無く強烈な破壊力を示

す能力であり、就職試験では遺憾なく能力を発揮した。何十社受けたのか判らないが、面接試験で必ず落ちて帰って来ていた。私もどの様な質問に君は何と答えたのか？を聞いているうちになぜ落ちたのかを納得させられたものだった。

質問に対して正鵠を射る回答をすることは基本的に難しい事では有るが、ホームランを打つように遠くに外してしまうと、この人間ははたして大丈夫なのか？と面接官は心配になるものである。しかし、日本大学には就職指導課なるものが有り、就職の面接対応や自己アピールの書類なども親身に添削してくれる。あまりにも落ち続ける為、卒業研究も進まず、且つ落ち込んで帰ってくる学生の表情を見ていると、私も落ち込んでくるため、その子と一緒に就職指導課に通い、募集要項を眺め、一緒に面接指導員とも相談をしてみたりもした。しかし、その後も受け続けた入社試験はことごとく落ち、万事休す！で2月を迎えた。研究室でも、就職が決まっていないのはその学生だけであった。

しかし、である。5年間の任期採用での公務員の研究職の公募が回って来た。テストと面接があるが、今迄の多くの失敗の積み重ねと多くの応援団の助けを受けて、その学生は最後の試験に臨み、どうにか任期付きの研究職を手に入れたのが、卒論発表後だったと思う。

人には必ず、神から祝福されている点がある。その子の場合人間が素直で正直、そして明るい点がこれにあたる。ただ、物事理解や解釈の仕方が人と異なる点が、その子の生きづらさを引き起こしている。

ならば、完全報告である！上司から何を命令されているのかを完全に把握し、それをノートに記し上司と一緒に確認する。お互いに完全に理解し合う状況に自分を持っていく努力をする。少しでも曖昧さが残る場合は、自分で判断せず、必ず上司に報告し相談をする。残り少ない時間でこれをその子には徹底させ、これからの職場でも実践するように求めた。

卒業式の日、卒業証書を受け取るその学生を遠くから眺めていて、私はなんとなく不安な気持ちであったと思う。

.....学生たちの研究もそろそろ順調になってきた頃かと思います。ご報告が遅れてしまいましたが、先月、就職が決まり本採用になりましたことをお知らせ致します。おかげ様で試験に合格することができ、来年度の4月から現在の職場に晴れて技術職として採用されます。先生には数々のご助力頂きまして、本当にお世話になりました。最後に、研究室の益々のご活躍を応援しております。

おめでとう！ 堅実な努力を怠らない人間には、いつも人生は素晴らしい。

(森)

水圏生物病理学研究室

平成27年度は、学部生16名、研究生3名、修士課程2年の藤倉君、同1年の武江君、板垣さん、桧山君、博士後期課程の竹内君、和田君（学術振興会特別研究員DC1）、共同研究者である藪健史先生（日本大学非常勤講師）、難波亜紀先生（学術振興会特別研究員 RPD・日本大学非常勤

講師）、そして教員の間野と、計28名の体制でした。

本年度は、4名の学部学生が大学院や看護師を目指して進学しました。また、大学院入試に再挑戦する者以外全員が、市役所、漁業組合、水族館、検査、飼料、水産商社、外食産業などに就職が決まりました。修士2年の藤倉君も無事修了し、医療系のコンサルティング会社に就職を決めました。英語が堪能な藤倉君には、国際的な活躍を期待しています。

現在、本学科の1年次学生において、一番人気のある業界は、やはり水族館になります。今年も本研究室から2名、学科全体をみても4名の学生が4月から水族館の世界で働くことに決まりました。毎年1名入る学生がいれば上出来と言われてきた狭き門の世界ですが、この10年近く、毎年2名以上、多い時で7名の本学科の学生が水族館で採用されています。本学科の学生は、総じて和やかで協調性があるのが、採用して頂けている理由の一つなのかもしれません。また、多くのOBOGが来校してくださり、現役学生達に話しをしてくれるのも、大きいように思います。

私自身は水族館で働いた経験はありませんが、厳しい世界であることはわかります。本学科では学外特別研修（インターシップ）があり、多くの学生が全国の水族館で就職体験をさせて頂いています。しかし、本研修を受けた半分の学生は、仕事の厳しさを知り、就職をあきらめます。そして入学当初は100名近くいた希望者も、4年次には10名にも満たないようになります。しかし、残った学生達の水族館にか

ける熱意は素晴らしく、応援のしがいがあります。研究室としても、昨年、水族館飼育担当者を対象とした魚病の研修会をやらせて頂く機会がありました。動物福祉論の高まりや、国内における魚病防疫の観点からも、今後も魚病学に習熟した学生を水族館業界に送り出すことができればと考えています。



今年は、例年以上に多彩な研究室メンバーで、微生物の国際学会 BioMicroWorld 2015（バルセロナ）に参加しました
(間野)

精密分析機器室

平成 27 年度精密分析機器室の構成人員は教員 1 名、3 年次学生 2 名でした。学生は 2 名とも短大からの編入生ではありますが、新江ノ島水族館へのインターンシップ参加、教職課程の履修等、学習意欲にあふれています。また、本年度より宮内が担当することとなった食品衛生コースに対応する分析機器実験（生物機能化学実験）にて使用する新しい分析機器（原子吸光分析装置およびガスクロマトグラフィー）が隣室に設置され、本年度の受講生（約 100 名）には滞りなく実施できました。来年度

は 2 名の卒研究生および若干名の 3 年次学生で、軟体動物リゾチームの性状解明および天然物由来の抗菌成分の研究を行う予定です。未だ記載する内容が少なく短い文言にて恐縮ではありますが、卒業生の皆様には今後ともご指導・ご鞭撻の程を、また、現役学生については、引き続き就職活動に関してご助言・ご助力を賜りますれば幸いかと存じます。

(宮内)

下田臨海実験所

平成 27 年度も海洋生物資源科学科をはじめ、各学科の実験・実習・卒業研究、さらには学部のフィールド実習、小型船舶操縦法実習やダイビングライセンス講習など、例年とほぼ同じ 3,400 名余の利用がありました。老朽化も進んでいるため所内各所で、ボイラー故障などいくつかの不具合も生じ、利用学生にご迷惑をお掛けしたこともありますが、予算縮小の折柄、修理修繕で何とか繋いでいきたいと思っています。

本年度から開講された「小型船舶操縦法実習」は 2 年次学生 80 名余と予想を上回る学生が受講することとなり、4 月から毎週 1 回の講義を学部で行った後の学科試験に全員が合格し、その後 5 班に分かれて下田臨海実験所において 2 泊 3 日の日程で、実技講習および実技試験に臨みました。本年度の受講者はめでたく全員が小型船舶操縦士 2 級試験に合格し、ライセンスを受領するとともに、同科目 1 単位も取得しました。同科目を通じて当学科学生の海への関心が更に深まることを期待したいと思います。

本年夏には、中高教員を対象とした理科教育セミナーの開催が予定されており、いつもは若者で賑わう夏の下田実験所で、今年は熟年の先生達の熱い眼差しが見られることになりそうです。本年も引き続き、下田臨海実験所を利用する学生および教職員が事故無く無事に実験・実習を行なえるよう祈念致します。

(臨海実験所長 小島 隆人)

自己紹介

助教 井上 菜穂子



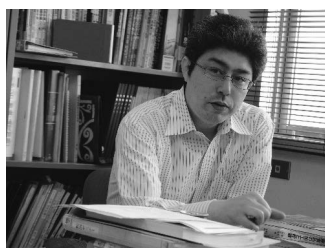
平成 27 年 4 月に生物機能化学研究室に着任いたしました井上菜穂子と申します。私はこれまで理化学研究所、自然科学研究機構、浜松医科大学、首都大学東京において研究を行ってまいりました。専門は主に分析化学となります。生物機能化学研究室では、特に骨格筋代謝に注目して、研究を行っていく予定です。

早いもので、本学に着任いたしまして 1 年が経過しようとしております。この一年間は、自分自身にとって新しい仕事へのチャレンジの年となりましたが、先生方、事務の方、学生の皆さんのお力添えを得ることで、なんとか無事に乗り越えることができました。この場を借りて、皆様に厚く御礼を申し上げます。

着任前の印象として、緑が多く、環境豊かな学び舎であると感じておりました。着任してからその思いは変わらず、素晴ら

しい環境で研究・教育に携われることに感謝しております。研究一本のこれまでのキャリアでしたが、本年より教育にも重点を置いた生活をしてまいりました。振り返りますと、自分自身の至らなさと課題も多く、今後、所属研究室の森先生をはじめ、学科の先生方からのご指導を賜り改善していきたいと考えております。さらに私事です。私には二歳の息子がおります。子育てと研究・教育の両立という非常に難しい課題にも、これから全力で取り組んでいきたいと考えております。桜水会関連では、来年度より 6 月に開催される総会を担当する予定となっております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

准教授 福島 英登



平成 27 年 4 月より、海洋生物資源利用学研究室に准教授として着任しました、福島

英登と申します。前任校は山口県下関市にあります(独)水産大学校で、約 8 年間奉職しました。専門はタンパク質化学、食品化学で、魚介類の鮮度維持方法や水産加工品の原料特性、品質向上技術などを研究テーマとしています。

さて 4 月から約一年が経ちましたが、新しい環境での実験の立ち上げ、授業、実習や学生実験、また卒業研究指導であつという間に過ぎたというのが実感です。多くの学生への授業プリントの準備やテスト採点、web 上での成績登録など今までにない

ことで戸惑うこともありましたが、その都度研究室を主宰されている松宮政弘教授はじめ、学科の先生方に丁寧なご指導やアドバイスをいただいております。この場をお借りして、感謝申し上げます。

また、印象に残ることも多くありました。他学科の1年生を対象にした、下田でのフィールド実習では、参加した学生の多くが本学科を第一希望にしていたとのことで、学生が海洋に魅力を感じてくれていることと本学科の人気を感じることができました。ただ、実際学科の中に若干やる気をなくした学生がいるのは残念ですが…。いずれにせよ学生にとって魅力的な学科となるよう、教育・研究活動に励みたいと思っております。

着任以前から桜水会の方々には様々な場面でお世話になっており、色々な温かいお言葉を頂きました。今後もお会いする機会がありましたら、一声いただけましたら嬉しく思います。末筆ではございますが、今後ともご指導、ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

同期会便り

○二期会

今年で第21回目を迎えた私達「二期会」も年を過ごすことに、一人・二人と鬼籍に入る同輩の訃報を知る度に、寂しさを禁じ得ない今日この頃です。しかし、まだまだ元気な仲間がおり、昨年と同じく、横浜駅西口天理ビル前から乗車8時30分出発の田中通・瀬戸昭彦・森和良氏と大谷木の4名、池袋駅西口東京芸術劇場前9時出発に乗車の富田敏朗・野村和夫・後夷英俊の三

氏、計7名のツアーで、皆さん元気に定刻集合一路上州草津温泉行きに乗り、目的地に向かいました。今年は、昨年計画した通り、「草津温泉紅葉の旅」としていましたが、ご存知の通り暖冬で、ホテルの予想より紅葉が遅れており、その点では少々残念でした。

旅装を解いて少し休憩後、当所で有名な大湯畑と湯もみ場の見物に出かけました。大湯畑は名前が示す通り大きく、湯の花を採取している現場であり、スケールの大きさに感心しました。草津観光協会が開催している湯もみ場は「草津熱乃湯」と称し、紅い腰巻を巻いたお姐さん達が「草津良いとこ一度はおいで」と、唄いながら湯もみ姿を見せて、観光客を喜ばせてくれておりました。私達もその中の一人です。宿に帰ってからは楽しみの夕食となり、酒類は飲み放題でしたが、昔ほど飲める訳もなく、一時間の時間制限ですので早々と部屋に戻り、二次会の楽しい歓談の時間を過ぎて翌日に備えました。その晩は一番の冷え込みとかで、朝風呂に入ってゆっくりと体を温めました。帰りは、昨晚の冷気で紅葉が一気に進み、白樺林の中を通り、近くに浅間山を眺めながらのコースは見事でした。また、コース途中で建設途上の「ハッ場ダム」の側を通り、運転手の説明により、水没する学校・役場の話を聞き、大事業の陰に明と暗があることを知らされ、感慨深いものがありました。

帰路は渋滞に遭うこともなく、順調に陽が暮れる前に到着し、次回元気で再会することを合言葉に、家路につきました。

途中休憩の時に次回の相談となり、田中

さんの提案で、彼が会員の箱根強羅温泉「ホテルグリーンプラザ強羅」一泊が皆さんの賛同で決まりました。近場だし、ゆっくりと行けるので、同輩の参加を期待いたしております。



左から、後夷、森、富田、瀬戸
大谷木、田中、野村



左から野村、森、富田、大谷木
後夷、瀬戸、田中

追伸 会の常連だった石川俊彦さんが、7月にお亡くなりになった由、奥様からご連絡を頂きました。彼とは第17回箱根強羅温泉「文の郷」で一泊して、楽しく盃を重ねたことが思い出されてなりません。謹んでお悔み申し上げますとともにお知らせいたします。合掌

(第2期 大谷木 緑四郎)

出口吉昭先生のご逝去を悼んで



日本大学名誉教授出口吉昭先生は、平成27年12月11日に東京で逝去されました。享年86歳でした。

出口先生は昭和4年3月31日に東京市京橋区（現在、東京都中央区）にお生まれになりました。昭和27年3月に日本大学農学部水産学科を卒業され、日本大学助手、専任講師、助教授を経て昭和49年4月に日本大学教授に就任され、水産増殖学研究室を主宰されました。その後、水産学科主任、横須賀臨海実験所長、企画広報担当、大学院専攻主任、下田臨海実験所長を歴任し、平成2年からは就職指導担当、企画広報担当、学務担当、学部次長として学部運営にも敏腕を発揮し、さらに、平成8年には学校法人日本大学評議員として大学運営にも尽力されました。このように、先生は、平成11年3月に日本大学を定年退職されるまでの長きにわたり、学科・学部・大学の教育・研究の発展に努められました。

先生は、水産学、特に水産増殖学の教育に関して、実験・実習、講義を真剣にかつ熱意を持って当たられたのみではなく、学生の声に真摯に耳を傾け、きめ細やかに指導され、水産業界をはじめ各界で活躍する数多の人材を送り出されました。また、文部省国費外国人大学院留学生の教育にも積極的に取り組み、在学中には気さくに個人的な悩みなどの相談にも乗り、無事学位を取得するよう導かれました。かれらは、

卒業後に母国に戻り、現在、水産増殖学の教育研究の枢要を担っております。

先生は、海外との研究交流にも積極的に取り組み、昭和 58～61 年には共同研究「甲殻類の生物学および水産増殖学的研究」をハワイ大学動物学科 Fred I. Kamemoto 教授らと実施し、多くの成果を挙げられました。また、このプロジェクトに参加した大学院生たちは、現在、日米の大学教員として活躍しております。

先生は、特に水産増養殖における環境の重要性に着目し、斯界の研究発展に大いに尽力されました。ご研究の内容は多岐にわたりますが、なかでも「循環ろ過式水槽に関する研究」、「東京湾沿岸域における環境に関する研究」、「水産動物の腸内細菌に関する研究」が代表的なものとして挙げられます。このような研究の成果が、今日脚光を浴びている陸上養殖や都市型水族館、無毒フグの作出、プロバイオティクスなど諸分野の発展につながりました。また、先生はこれらの研究成果を多くの学術論文や著書などとして国内外に発信されるとともに、日本水産学会主催のシンポジウムでも数多く講演され、それらは水産学シリーズ「淡水養殖と用水」、「活魚輸送」、「水産増養殖と微生物」、「フグ毒研究の最近の進歩」、「エビ・カニ類の種苗生産」、「養殖魚の価格と品質」、「現代の水産学」として出版されています。

日本水産学会においては、関東支部担当理事、企画担当理事、庶務担当理事、監事などの役員を 16 年間務められ、学会の重鎮として運営に深く関わったほか、評議員、春季大会委員長、水産増殖懇話会委員会委

員長、漁業環境保全問題特別委員会委員長、シンポジウム企画委員会委員長、学会賞選考委員会委員などを歴任され、学会の発展に多大な貢献をされました。これらのご功績に対し、平成 11 年 4 月には日本水産学会から名誉会員に推薦されました。

一方、日本水産増殖学会では、平成 9 年から 3 年間、会長（第 3 代）として学会の発展に大きく貢献されました。また、平成 10 年には韓国・済州大学校で開催された第 3 回韓日・日韓水産増養殖シンポジウムに日本側代表として出席し、同シンポジウムを成功に導かれました。これらのご功績に対し、平成 13 年 4 月には日本水産増殖学会から名誉会員に推薦されました。

平成 21 年には出口先生のこのようなご功績に対し瑞宝中綬章が授与されました。さらに、平成 27 年 12 月 11 日には正五位に叙せられました。

戦後の水産系私立大学の黎明期を支えられ、深い学識と高潔な人格をもって多くの人材を育成されました出口吉昭先生の在りし日のお姿を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

（教授 杉田 治男）

訃報

内藤 秀次	（第 1 期）
黒岩 和	（第 1 期）
出口 吉昭	（第 1 期）
石川 俊彦	（第 2 期）
佐藤 真	（第 4 期）
吉川 洸三	（第 4 期）
吉澤 康郎	（第 9 期）

坂本 起志夫 (第10期)
會田 晴英 (第13期)
青木 靖 (第16期)
佐野 修 (第18期)
篠田 英雄 (第20期)
竹中 敏昭 (第23期)
新沢 丘 (第27期)
田代 重晴 (第27期)
比田井 太郎 (第35期)

以上、16氏には永眠されたのご連絡を頂きました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

近況報告

【第1期】

○杉浦 宏

60 数名で始まった桜水会も、今では大変な数になり、益々発展していく姿を楽しみに会誌を読ませて貰っています。折があったら水族館の関係の後輩達と話し合えたら楽しいだろうと願っています。

○内田 泰

会報 39 号を見ながら、思いが 64 年前に飛んで行きました。使いものにならなかった実習用船（浜に打ち捨てられたまま）の姿や、パン屋のオバサンのことや、馬堀のことを・・・観音崎～久里浜を何回も歩いて行ったことを、沖の繫留ブイについていたイガイの味など・・・思い出は遠い。会員各位のご健勝を・・・。

○新美 憲太郎

皆さんしっかりやって下さい。高齢のため出席はできませんが、将来を期待しています。

○倉本 文雄

ご盛会祈念いたします。

○原 美

特になし。現在自宅療養中です。

【第2期】

○宮本 正

体調の関係で出席ができません。よろしくお取り扱いください。

○富田 敏郎

総会他の案内ありがとうございました。名ばかりの会員であり、ご面倒をお掛けしております。各研究室の活動や同期会・校友の近況報告などなど、中身の濃い校友会報・桜水会報に元気を貰いました。近時腰痛など体調万全でなく、残念ながら欠席します。盛会を念じます。

○香取 進一

少しは不具合もありますが、まあまあで過しております。会に出席もできず残念です。89 歳となりました。

○大谷木 緑四郎

齢 85 歳となり、腰痛に耐えながら元気に独居生活を送っております。従来は総会・懇親会に参加するのが唯一の楽しみでしたが、現在ではそれも叶わず、会報を楽しみにしております。総会・懇親会の盛会と、桜水会の益々の発展充実を祈念致しております。

○橋詰 弥一郎

平成 12 年 11 月より 13 年 12 月まで腰椎カリエスを患い入院生活を送り、以後 5 分と立っていられず困っております。従って欠席致します。ご盛会を念じつつ・・・。

【第4期】

○元島 和義

体育実技の予科として神津牧場へのロ

ードワーク。霞ヶ浦では伝馬船の漕ぎ方の特訓を受けた。教育実習は日大桜が丘高で実践。母校に感謝。

○久米 穂積

卒業してからちょうど 60 年になり、昭和 30 年の頃を思い出して、今、第 10 次南氷洋捕鯨出資を原稿用紙 25 枚くらいにまとめて書いています。でき上がったら桜水会の本部に一部送りたいと思っています。腰痛がまだはっきりしませんので今回は欠席します。皆様によろしくお伝え下さいませ。

○國守 俊策

桜水会ますますの発展を望んでいます。下馬校舎での 4 年間のうち馬堀の海への実習に一度だけ出かけた記憶があります。

【第 5 期】

○浜高 善祐

小・中・高生を対象に空手の指導をしながら元気に過ごしています。昨年横浜で桜鱗会に参加、楽しく、なつかしい一時を過ごしました。

【第 6 期】

○鈴木 和威

桜水会会報第 39 号をお送り頂き、ありがとうございます。訃報・近況報告欄の中で、私が生物資源在職中に大変お世話になりました諸先生方のお名前を拝見しました時には、当時のお元気なお顔しか思い出されません、ご冥福を心からお祈り申し上げます。私も、一日も早く大学病院通いが終わるように治療に専念いたします。今後とも、引き続きよろしくお願いいたします。

○長瀬 親正

このたび 20 年間従事した行政区長を退

任し、また各種公職からも徐々に離れられるようになり身軽さを感じている近況です。健康管理に留意しながら過したいです。

【第 7 期】

○関 洋介

首を回らせば 81 年。人間の是非は一夢の中の感。「バックギア あればと思う 八十路かな」激動の未来に向って前進あるのみ。身体を動かすことで脳を刺激し老化防止。読書、ウォーキング、ボウリングなどを楽しんでいます。

○大西 慶一

静岡県職を平成 6 年に定年退職して早や 20 年。その間、漁業団体に 10 年ほど席を置き、現在は小旅行などして余生を過ごす生活です。先日、山梨県にあるリニア実験施設を見学。時速 603km の世界最高記録を出したと聞き驚きました。12 年後には、東京名古屋間を営業運転するとのこと、それに乗車でできればと頑張っています。

【第 8 期】

○吉田 勉

総会には出席できません。盛会をお祈りいたします。会報 39 号に同期（8 期）の 7 名の近況を読み、嬉しくて何回も読みかえしております。同期の諸君頑張ろう。

○藤原 貞夫

1 月より入院して足が悪くなり出席できません。79 才になりました。

○村田 安彦

総会には出席出来ませんが、桜水会のご発展を心から祈念しております。数年前から始めたパークゴルフは、来週もまた大会があります。頑張ります。

○上野 智章

80 歳になりましたが、まだまだ元気しております。旅行にいたり、音楽会にいたり、一日一日を楽しんで毎日過ごしています。太田さん、藤原さん元気になっていますか。

【第 9 期】

○五味 滉行

総会の御盛会をお祝い申し上げます。会報をお送り下さり、事務局の皆様には感謝致します。海洋生物資源科学ならびに桜水会の増々のご発展を祈念致します。他事の都合で総会に出席できません。次回は必ず出席します。

【第 10 期】

○川端 肇

いつもありがとうございます。傘寿に向かって元気に人生を楽しんでいます。同期会便りの中に何人かの人の顔が浮んでいます。特に、後輩の皆さんのご活躍とご盛会を祈念します。

○山内 正仁

盛会を祈っております。

○櫻木 進

小生も、今年 10 月に満 79 歳になります。最近、先輩諸兄や同期の訃報に接し、ぼつぼつ俺の番かなと思ひ、体が動くうちは地域社会でお役に立つように老人会やガイドの会で世話役をしております。

【第 11 期】

○木之瀬 孝平

総会・同窓会の盛会を祈念申し上げます。

○森 文也

ご盛会祈念申し上げます！！

【第 12 期】

○川瀬 守民

体調不良のため、欠席させていただきます。幹事の方々、事務局の皆様方のご苦勞に対し、大変恐縮しております。生物資源科学部・桜水会の増々の発展を祈念します。

○吉田 浩哉

会報 39 号で飯沢君が元気であることを知り、安心しました。金坂、田丸君達も元気です。いつか会える日を楽しみに・・・。

【第 13 期】

○横地 龍男

隠岐の海の結婚披露宴で上京した際、同期（13 期）鳥居太郎のお世話で、会田、磯兼、金高、前川、前田、後輩では 16 期の牛島、18 期の橋ヶ迫会長、20 期の村上にご参集頂き、楽しい一夜を過ごしました。

○成田 稔

体調不良により出席出来ません。盛会を祈ります。

○前田 一求

総会・同窓会の通知誠にありがとうございます。都合により欠席致しますが、桜水会の御発展を祈念しております。今のところ元気です。

○周 耀傑

1999 年より台湾海洋大学の教授職をリタイアしました。現在、日本大学校友会台湾支部の理事を務めています。

○中山 誠

7 月 4 日（土）兄の 3 回忌の法要が故郷で行うことになっています。そちらへ出向くため欠席させていただきます。

○一石 稔

大変申し訳ありませんが、欠席（体調不良）させて下さい。ご連絡ありがとうございます。

【第 14 期】

○篠崎 丈夫

桜水会事務局の皆様方に感謝しております。学部の情報嬉しいです。1ヶ月前程、14期の仲間4名久しぶりに集まり、同期生たちの現況、日大時代の楽しかったことなど語り合っただけで会食（渋谷）しました。

○長田 光司

卒業後 50 年間、サラリーマン生活を送りました。今、年 3 回は海外旅行を楽しんでいます。欠席は業務の都合で残念。

○丸山 勉

おかげ様で元気です。週 2 回食品会社の顧問として活動しています。

○石川 太郎

家を新築し、家の中に水槽部屋を作り、趣味を楽しんでいます。

○植松 源八郎

遠方よりご盛会をお祈りしております。

○山口 忠昭

事務局の方ご苦労様です。初めて参加します。

【第 15 期】

○糸満 盛健

いろいろご連絡頂き有難うございます。御発展をお祈り申し上げます。

○宮 忠義

愛犬リキ（20 歳）、人間だと 96 歳の介

護で毎日が忙しいです。小生は平凡に元気に過ごしています。

○平岩 良允

今回は残念ですが、欠席します。新会長の下で頑張ってください。

○小松 保雄

現在練馬区のシルバー人材センターの会員で地元の小学校で施設管理員をやっています。また、趣味の剣道を生かし、地元小学校で子供達を指導しています。（日・火曜日）

○北川 邦彦

ご案内ありがとうございます。残念ですが欠席とさせていただきます。小生も来年で勤続 50 年を迎えます。未だ、フルタイムの現役で頑張っております。

○井村 圭輔

役員、幹事の皆様、お世話様です。

【第 16 期】

○兼子 昭夫

体調不良につき、欠席とさせていただきます。

○関根 敏彦

都合により欠席致しますが、会員皆様のご活躍を祈念申し上げます。

○谷岡 勉

毎度の欠席スマンです。但馬魚市場の会長をしています。山陰、但馬、丹後へお越しの節はぜひお立ち寄り下さい。物故学友の冥福を祈りつつ・・・。

○山本 武人

会報の職場便りと研究室便りを、毎回興味を持って読んでいます。研究内容も多彩

で深みもあり、感心しきりです。つけても
思い出すのは川本教授から研究室の入退
室の挨拶の仕方を指導されたことです。50
年前のことです。

○柳沢 践夫

桜水会の益々のご発展を祈念申し上げます。
当方 70 歳を越えて、体に“ガタ”
が出始めました。

【第 17 期】

○鈴木 實

海外出張のため出席できず申し訳あり
ません！！

○平田 康彦

70 歳になり、元気でアルバイトをしな
がら頑張っています。

【第 18 期】

○林 公義

当日は日大での“博物館学”の講義日で
すので、2 時からの講演会には出席する予
定です。大学博物館の運営にも協力してい
ます。先輩、後輩の皆さんにも是非力を貸
して頂きたいものです。

【第 19 期】

○青木 卓之

現在は無職です。

○村井 正治

当日は所用のため出席できません。盛会
を祈念申し上げます。

○田草川 傳

洋服屋の次男の私は、水産科を出て、家
具屋を始め、娘 3 人（全員独身ですのでよ
ろしく）に恵まれ、今は不動産をしております。

○加部 郁夫

橋ヶ迫会長・事務局の先生方大変でご苦
労様です。桜水会の会員各位の皆様がもっ
と大勢の人が総会・懇親会に出席して下さ
るよう祈念します。私も浅草花川戸にてま
だまだ下駄問屋で頑張っております。浅草
においての折には、ぜひお立ち寄り下さい。
いつでも待っています。

○松井 正之

東偵三先生、望月篤先生の訃報に接し悲
しみでいっぱいです。謹んでご冥福をお祈
りします。私は元気でまだ現役であれこれ
頑張っています。時に、日大号の時代を想
い出されます。どなたか声かけてください。
集まりなつかしい話をしませんか？よろ
しく。（備前市）090- 7549- 0503。お待
ちしています。

○武田 修一

19 期生の同窓会をなんとかと思っています。
ただ、体調を崩しております（入院
しているわけではありません）ので、追っ
て間野先生に連絡します。

【第 20 期】

○川村 淳

満 64 歳で完全定年退職し、今は成田市
役所より行政協力を委嘱され、5 年目を迎
えました。遠洋漁業科卒業した仲間はどう
しているのかな？

○本間 英一

自宅付近も、やっと区画整理の復興工事
が始まりました。津波の被害を受けた石巻
の門脇地区も 3 年後には新しい街になり
ます。

○中村 美知男

特に変化なし

○北村 繁

ご盛会をお祈りしています。

○南 義久

妻との北海道旅行のため、欠席させていただきます。会の益々の発展をお祈りいたします。

○西ノ宮 信一

顧問となり会社へ行っています。魚食の文化と安全が脅かされています。地域からの言い伝えや新しい知識を子供に伝える運動に力を注いでいけたらと活動中。

【第 21 期】

○友原 和夫

1 級水産練り製品製造技能士として厚生労働省の「ものづくりマスター」に認定されました。現在も練り製品メーカーで技術開発部を担当、若年技能者の人材育成を行っています。生涯、現役のかまぼこ職人として頑張っていきたいと思っています。

○海老沼 四郎

卒業と同時に第一原発近くの南相馬市にある不振営業所を立て直し、その後税理士取得のため、日大経済学部大学院に通い、29 歳で税理士を取得し、現在は相双漁協の監査役として税務相談等に従事しております。大震災の当日は漁協の確定申告に従事していました。

【第 22 期】

○村松 立朗

静岡県立焼津水産高等学校の再任用静岡県立焼津青少年の家臨時職員の期限が切れましたので、一休みしようと思いましたが、縁あって平成 26 年 12 月 1 日より民間の大坪水産株式会社社長に拾ってもらいました。5 ヶ月が過ぎ、やっと仕事に

も慣れ、今は衛生管理品質管理の責任者として頑張っています。東および望月両先生のご逝去にただ涙です。ご冥福をお祈り申し上げます。

○会田 典久

65 歳になりましたが、元気に働いております。

○酒井 秀信

定置網を全営しながら地域興し活動に励んでいます。昨年 11 月総理官邸で第一回ふるさとづくり大賞、内閣総理大臣賞を受賞しました。

○泰道 博

出席します、よろしく。会では知った人に会うことはなく一期一会ですが、久住先輩（8 期）とは数年連続してお会いしています。昨年は 2 人の方から名刺を頂きました（鳥居先輩（13 期）と三谷後輩（26 期）です）。今年はどうかな？学生の出世を一番嬉んでくれた寺内誠先生とは、今一度お会いしたかった。

【第 23 期】

○高橋 雄三郎

ご苦勞様です。近海郵船（株）を本年 5 月末日に退職しました。今後、再就職するか検討中です。しばらくのんびりしたいと思っていますが一。

○大杉 幸毅

昨年から大病し、3 回入院 2 回手術しましたが、命拾いました。人生想定外でした。残された時間、今は一日を充実させて生きたいと考える今日この頃です。

○繁沢 裕志

昭和 49 年 4 月に入社したグリコグループ

プの会社を定年退職し、5年以上になります。現在、京都で時々関東方面から来た修学旅行生の観光ガイドをやっています。50歳以上若い中学生を引率するのは大変ですが頑張っています。

○伊藤 浄治

定年退職後、のんびりと暮らしております。年に1度、孫とハワイ旅行をしておりますが、昔実習船「日本大学号」で寄港したアロハタワーの栈橋付近は、昔の面影はなく、タワーのみがしっかりと建っていました。

○池田 和司

卒業式の次の日から北海道に来て41年になります。当時の気温と比べると温暖化を感じており、北海道の米が一等米になる時代、東京に住むのは大変だと思っています。

【第24期】

○五十嵐 俊博

同窓会の出席楽しみにしています。

○小野 龍一

東京でのコンサートの帰り、マネージャー（家内）と共に、41年振りに六会校舎にお邪魔しました。昔とは全く様子が変わっており、同級生の杉田教授の研究室に行くまで何回も学生を尋ねてたどり着けました。現在は生物資源科学部と学部名は変わりましたが、素晴らしい校舎となっております。

○岡本 雅弘

現在、学校法人立の大学受験予備校の理事・校長（定年は無いらしい）、県の予備校連盟会長、専修学校・各種学校連合会の理事、地域の民生・児童委員の副会長など

に就いているが、「もう、ええでエ」と言われるまでは頑張ってみよう。三茶、馬堀海岸、そして日本大学号・・・機関のみんな、元気しているか！

○辻 雅司

2年前に水産タイムス社を定年退職し、現在は日刊食料新聞の顧問と東京海洋大学の客員教授を拝命。6年前より、農林水産省独立行政法人評価委員では最後の水産分科会長を勤めました。著書は10冊目「和食食材かまぼこの世界」を出しました。

○堀内 昇

27年3月末にて定年退職致しました。今後は大好きなバイク三昧の日々を送る予定です。10年毎の同窓会、楽しみにしています。

【第25期】

○森 誠一

何とかやっております。

○橋本 充

昨年（平成26年）3月末で定年退職しましたが、再任用教諭として引き続き富山県立氷見高等学校に勤務しています。またカヌースラロームの国際審判として、日本カヌー連盟主催の公式大会で審判しております。7月4・5日は岩手国体リハーサル大会があるので、出席できません。

○山崎 アキ子

申し訳ございません。欠席致します。ご盛会祈念申し上げます。梅雨時です。ご自愛下さいまして、お過ごし下さいませ。

【第26期】

○鈴木 健治

益々のご発展をお祈り申し上げます。

○高橋 昇

3年前はパラオへ、去年は知覧へ、本年7月は鹿屋に行つて来ます。一人の日本人として命をかけて戦った先人達の慰霊に、妻と娘と3人で年に一回行っております。体の続く限り、方々を廻りたいと思っております。

【第27期】

○安齋 寛

申し訳ありませんが、当日、出張の予定が入っており、参加できません。皆様によりしくお伝えください。

○橋本 和則

昨年11月に定年になりましたが、一応嘱託で残っています。記念旅行で、久しぶりに親子3人で3年ぶりにウィーンに行つて来しました。

○松永 一男

校友会和歌山県支部総会に大阪支部代表として出席するため、欠席させていただきます。

【第28期】

○鈴木 稔

平成28年度末で定年退職を迎えます。定年後の予定はありませんが”晴釣雨読”の生活にあこがれています。水産指導でアフリカに赴任して以来、30年以上、国際協力に尽力しています。

○津崎 順

福島県の水産業と観光業はまだまだ復興しません。震災は防災意識の面から風化することが問題ですが、原発事故風評被害は早くなくなつてほしいものです。開館15周年の「アクアマリンふくしま」にお出かけください。

【第29期】

○柴田 一郎

いつもありがとうございます。今回も欠席させていただきます。先日、同級生の種田君と岩手県陸前高田市で会いました。(仕事で)

○神谷 昌明

宜しくお願い致します。

○徳倉 正美

塚本先生の講演には大変興味を持っていますので是非参画したいのですが、自元での行事があるため出席できません。次の機会を楽しみにしています。

【第30期】

○荻野 真澄

孫が生まれました。

【第31期】

○逸見 明久

平成27年4月より福岡県教育センターで勤務しています。初めて教育現場を離れ、寂寞を感じますが、教育改善研究を行う中で、生物介在教育の有効性を感じる日々です。桜水会会員諸氏の益々のご活躍と母校の更なる発展を祈念致します。

【第32期】

○井上 博

卒業して32年が経ちました。今はマンション管理の仕事をしています。現在の勤務地、マボリシーハイツは偶然にも昭和47年廃止となった横須賀校舎・臨海実験所の跡地の上に建っています。こんな偶然あるのでしょうか。先輩方が学んだかつての場所で、自分が仕事をしているのは卒業生の1人として感無量です。

【第 35 期】

○田村 洋二

30 年近く勤めたコカ・コーラウエスト（株）を早期退職し、現在、広島大学大学院社会科学部研究科博士課程前期にて学生をしています。50 過ぎての新たな挑戦です。

【第 37 期】

○大橋 誠之

同窓会名簿の請求方法をご教示ください。

【第 45 期】

○原口 弘嗣

今年、仕事の為、参加できません。来年 20 年目ですので、ぜひ参加したいと思っています。よろしくお願いします。

【第 46 期】

○岡本 大志

少し遅いですが、子育ての真っ最中。長男は 2 歳、まだ出て歩くには気をつかう頃ですので、欠席とさせていただきます。

【第 53 期】

○磯邊 隆

子供の小学校の PTA 副会長になりました。小学校の池の改修工事を PTA でやる事になり、大先輩であるおさかなポストの山崎充哲さんにお手伝い頂いております。マナマズや外来種ガメを川で捕獲して飼育する予定です。

【第 64 期】

○千葉 仁美

専門分野からは離れましたが、日々研究に打ち込んでおります。

会計報告

平成 26 年度日本大学桜水会の収支決算は以下の通りですので、ご報告致します。

会計担当 糸井 史朗

平成26年度 日本大学桜水会決算報告書

1. 収入の部

項 目	予算額	決算額	摘要
準会員年会費	1,769,600	1,739,000	
繰越金	280,359	280,359	
会報発送補助	200,000	200,000	学部校友会より
雑収入	0	55,000	同窓会祝儀55,000円
利息	5,000	4,645	
その他	1,500,000	1,000,000	終身会費積立金一部取り崩し
合 計	3,754,959	3,279,004	

2. 支出の部

項目	予算額	決算額	摘要
会議費	0	0	
通信連絡費	630,000	669,475	
会報・総会案内発送	600,000	639,648	
通信費	30,000	29,827	
事業費	2,480,000	2,090,222	
会報発行	250,000	257,580	
準会員対策費	300,000	356,725	運動会Tシャツ
卒業記念品	180,000	172,800	タイピン、ブローチ
総会・同窓会費	600,000	462,840	
名簿管理費	200,000	137,866	業者委託
学科パンフレット作成補助費	500,000	422,000	
学会参加費補助（学生）	250,000	93,300	
講演料	100,000	80,000	5名分(概論、交通費含む)
その他	100,000	107,111	学生表彰、卒論コンペ、振込手数料、祝儀代
事務局費	270,000	261,320	
会議費	90,000	132,293	
会議時交通費補助	40,000	32,000	
消耗品費	30,000	14,027	
アルバイト費	100,000	83,000	
その他	10,000	0	
慶弔費	30,000	10,000	
予備費	344,959	0	
繰越金	0	247,987	
合計	3,754,959	3,279,004	

終身会費積立金

平成25年度まで	26,430,387	
平成26年度	-1,000,000	終身会費積立金一部取崩(-1,000,000円)
合計	25,430,387	三井住友銀行、かながわ信用金庫

会員名簿発行積立金

平成25年度まで	1,232,522	
平成26年度収入	246	利息246円
合計	1,232,768	横浜銀行定期

事務局便り

- 当学科の 1 期生で永年にわたり本学における教育・研究のみならず、日本水産学会においても多大な功績を残された、出口吉昭先生が昨年 12 月にご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。
- 本年度より、福島英登准教授、井上菜穂子助教が新たに当学科に赴任されました。今後の益々のご活躍をお祈り致します。
- 本年度も橋ヶ迫覚会長（18 期）体制で、会員各位の絶大なご協力を得て桜水会の運営を行って参りました。事務局も微力ながら支えさせていただきますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。
- 平成 27 年度の卒業生（第 65 期）は 146 名です。諸先輩のご指導、ご鞭撻よろしくお願い致します。正会員の総数は 8,818 名となります。
- 平成 27 年度 1 年次前期開講科目、海洋生物資源科学概論の一環として、4 月 12 日（火）：長谷川勝治氏（20 期、元・焼津水産高校校長）、7 月 14 日（火）：内田純也氏（61 期、馬頭高等学校）、村上大雅氏（60 期、共立製薬㈱）、7 月 21 日（火）柴山一輝氏（61 期、東洋冷蔵㈱）、土井亮真氏（60 期、定置網漁業）の講演会を実施しました。
- 本年 3 月をもって、当学科事務で様々な仕事に対応してこられた福島翠実習助手が退職されます。長い間お世話になり有難うございました。

- 事務局運営は、荒学部校友会報担当、糸井会計担当、間野庶務担当に小糸智子、牧口祐也、中井静子の 3 先生が担当補助として当って来ましたが、新任の福島英登、井上菜穂子両先生も事務局運営に加わって頂くこととなりました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。
- 桜水会会員各位の住所、勤務先、電話番号などに変更が生じた場合には個人情報保護の観点から、桜水会ホームページの名簿修正依頼上で修正 <http://cgi.solution1.jp/osuikai/meibo.php>（Yahoo で日大桜水会 → 名簿修正依頼）もしくは郵送にてご連絡下さい。なお、平成 22 年 4 月 1 日より日本大学生物資源科学部の郵便番号が「252-0880」に変更になっておりますので、ご注意下さい。
- 本年度の総会は、6 月 11 日（土）に本学部で開催されます。会員各位におかれましては、ふるってご参加の程、お願い申し上げます。

（事務局長 小島 隆人）

編集後記

- 桜水会会報本号では、「職場便り」（6 件）、「同期会便り」（1 件）、および会員の「近況報告」を掲載しました。
- 桜水会のホームページ（HP）を立ち上げ、学科 HP にリンクしております。桜水会の沿革・歴史、役員・事務局、各卒業期の会員数の他、桜水会会報 24 号（平成 11 年度）以降のバックナンバーを掲載しており、ダウンロードもできますの

で是非ご覧ください。学科ホームページ
のアドレス [http://hp.brs.nihon-u.ac.
jp/~kaiyo/](http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/)です。

- 同窓会を企画されている幹事の皆様へ
個人情報保護の観点から名簿の提供は
困難な状況です。対応策としまして、総
会案内送付時に、幹事の方が作成された
同窓会開催案内を同封する形をとらせ
て頂いたこともありました。必要に応じ
て、下記にご相談ください。

E-mail:mano.nobuhiro @nihon-u.ac.jp
(間野 伸宏)

住所変更手続きについて

平成 22 年 3 月 1 日より、桜水会ホーム
ページ上から名簿（住所・勤務先等）変
更届けができるようになりました。

<http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo>

日本大学桜水会会報 40 号

平成 28 年 3 月 発行

編集 日本大学桜水会事務局

発行 日本大学桜水会

日本大学生物資源科学部

海洋生物資源科学科内

〒252-0880

神奈川県藤沢市亀井野 1866

電話 0466 (84) 3680

E-mail:kojima.takahito@nihon-u.ac.jp